

英賀城およびその周辺の 時系列地理情報データベースの作成

小西良幸*，中尾幸一**

Creation of Multi-temporal Geographic Information Database of Aga Castle and the Neighborhood

Yosiyuki KONISI*，Kouichi NAKAO**

Keywords : castle , geographic , database

1. はじめに

英賀は兵庫県姫路市飾磨区にある古くからの地名で、現在でも飾磨区英賀や飾磨区英賀清水町などがある。また、付近の飾磨区中浜町，飾磨区西浜町などを含めた地域の名称としても使われる。ここにはかつて英賀城が築城されていたが、現在往時の姿をしのぶ建築物等は見当たらない。そこでその実態を知るためのデータとして、海岸線・河川・街道・村落などの記録を整理し、GISを用いた工学的な観点から、英賀周辺の経年的な地理情報データベースを整備すること、また、英賀城を復元することを本研究の目的とした。特に英賀城を中心とする地域の歴史的な変化についてより容易に調査できるような資料を作成することに重点をおいた。

2. データベースの構成

データベースは、英賀城のあった南播磨地域のものと、英賀城に関するものに分けて保存した。また、地図データを用いて各種の主題図を作成した。データベース全体の構成は図1に示すとおりとした。

3. 南播磨地域のデータ

3.1 海岸線の変化 戦国時代線から現在までの海岸線の変化をデジタルマップとして保存した。これを使ってその変化を表したものが図2である。英賀城が城として機能していた時期には、英賀城付近までが海で、港を持つ城であったことがわかる。

3.2 地質図 南播磨地区の地質図に、海岸線と英賀城のデジタルマップを重ねがきすることにより地質からみた英賀城の立地を表す図を作成したものが図3である。この図から英賀城は砂州上にあることがわかる。また、周囲は沖積層であり、湿地帯であったことがわかる。これは文献⁽¹⁾にある「北は

*都市工学科2010年度卒業生

**都市工学科 教授

人馬の膝をも没する柳樹蒼生泥濘湧水の深い沼沢が天然の要害となって・・・」を裏付けるものである。

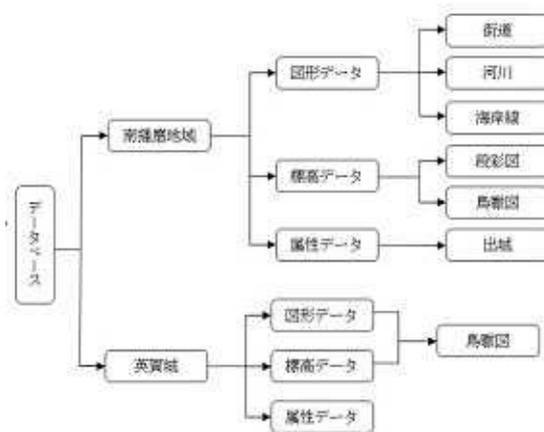


図1 データベースの構成



図2 姫路の海岸線の変化

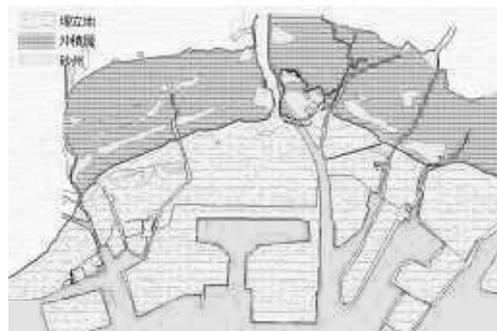


図3 英賀城周辺の地質図

3.3 英賀城の支城

英賀城周辺にある、英賀城に関係をもつ城主の城、館、構について、その所在地の座標と名称を記録した。座標は日本平面直角座標系の 系（原点 経度 $134^{\circ}20'0''$ 、緯度 $36^{\circ}0'0''$ ）としている。表1がそのデータである。このデータと地図を結合することにより、英賀城の勢力範囲を示す図を作成することができた。図4がそれであり、その状況がよくわかるものとなっている。

表1 英賀城の支城のデータ

X (m)	Y (m)	名称
-133960.149	24519.642	凸平松
-132541.937	25953.703	凸西土井
-132391.33	26349.287	凸小坂
-131776.378	25677.815	凸熊見
-131489.879	26825.445	凸才
-132805.519	27556.692	凸広畑
-131725.731	28021.108	凸山崎
-130852.648	29019.193	凸苔編
-129445.258	30109.383	凸西庄
-130249.017	30385.059	凸岡田
-130986.137	30126.288	凸町の坪
-131469.439	30021.732	凸玉手
-131994.196	30502.699	凸構
-132717.875	30116.665	凸加茂
-131044.571	31475.742	凸栗山
-131923.173	31470.86	凸亀山
-132802.554	31606.044	凸清水
-133426.984	31691.711	凸下中島
-130951.62	33080.712	凸北條
-132918.994	31936.475	凸下野田
-131617.994	29256.881	凸高町
-131040.043	30660.806	凸中地
-133220.623	24345.478	凸井口
-129195.258	28659.124	凸岸



図4 英賀城の支城

3.4 南播磨の鳥瞰図の作成

図2, 図3, 図4を国土地理院発行の25000分の1地形図「網干姫路南部」に張り付けることで、網干姫路南部と対応する数値地図50mメッシュ(標高)の523414.mem, 523415.memを用いて、鳥瞰図を作成することができる。図5, 図6, 図7はそれぞれ図2, 図3, 図4を鳥瞰図としたものである。鳥瞰図にするために用いたのは、フリーソフトのカシミールである。それぞれ平面図とは違った立体的な表現となり地図を見慣れていない人にも分かりやすい表現となっている。

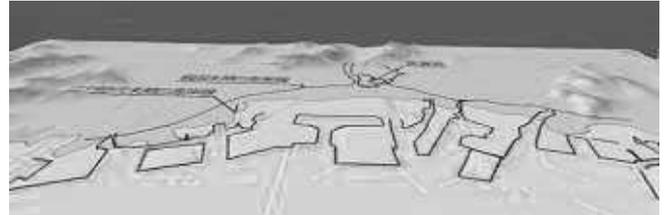


図5 英賀城周辺の海岸線の変化を表す鳥瞰図

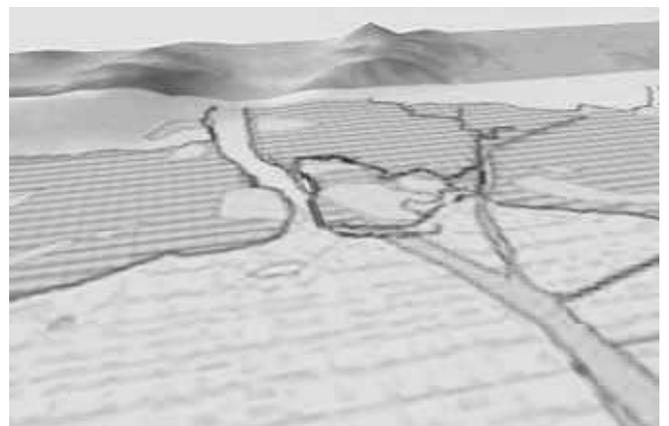


図6 英賀城周辺の地質を表す鳥瞰図



図7 英賀城の支城を表す鳥瞰図

4. 英賀城跡の復元

4.1 平面図の復元

大正12年陸地測量部発行の2万5千分の1地形図の英賀城周辺を切り出したものが図8である。地図のなかに土塁跡と思われる表現があり、英賀城の復元の資料となるものと思われる。また、図9の英賀めぐり案内図に描かれている英賀城、図10の中世末期における「英賀町」

の想定図などを参考にして明治34年の地図上に復元をした．図11がその復元平面図である．

4.2 標高データの作成 復元した平面図を，その標高により色分けした図を作成（図12）する．具体的には，図中の地物の標高および色を，それぞれ定めて，間隔を縦3m，横3.72mで，その点の色から高さを求めて記録し，国土地理院発行の数値地図50mメッシュ（標高）と同じフォーマットの標高データを作成する．

4.3 復元鳥瞰図の作成 図12の範囲と同一の復元平面図を作成する．図13がその例である．図12より作成した標高データと図13を重ねることで鳥瞰図を作成することができる．鳥瞰図の作成にはBird's View（マップコン社製）を使用した．図14，図15はその例である．



図10 中世末期における「英賀町」の想定図

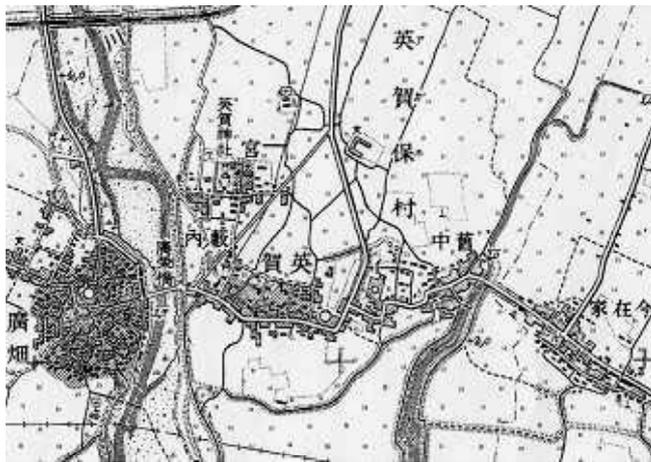


図8 明治34年の英賀城周辺の地図



図11 英賀城復元平面図

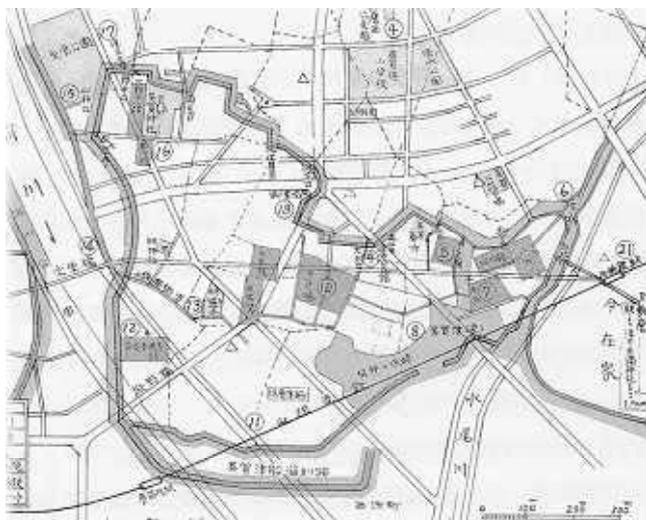


図9 英賀保めぐり案内図の英賀城

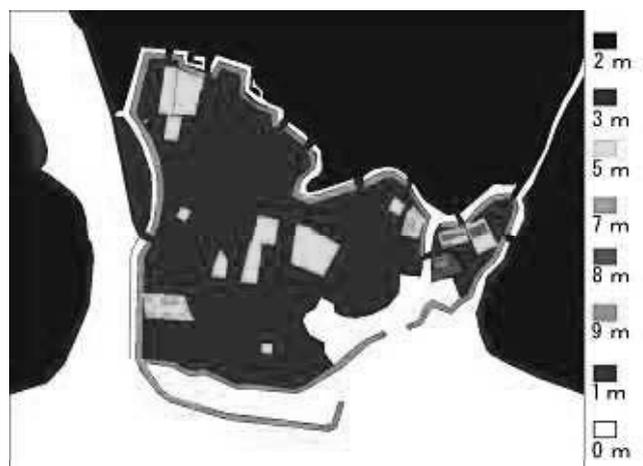


図12 標高により色分けした図

5. 英賀城跡の現在の位置

英賀城の復元図は，デジタルマップとしているので，現在の地図に重ねがきすることで，その位置を確認することができる．図16は英賀保周辺の住宅地図に英賀城を重ねがきしたものである．一部の道路は土塁の線や明治の道路と重なっている．また，

夢前川が昭和前期の改修により流れを変えて城内の一部が川底にあることもわかる。

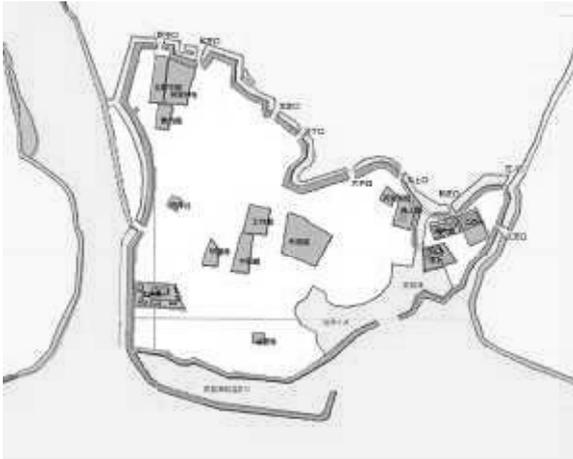


図 1 3 英賀城復元図

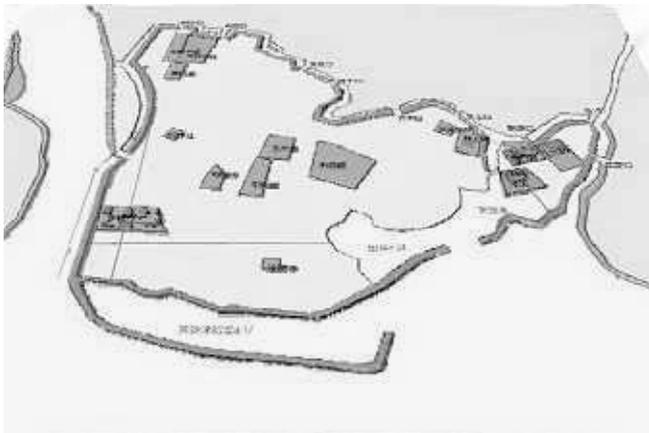


図 1 4 南方向より見た鳥瞰図



図 1 5 北方向の低空から見た鳥瞰図



図 1 6 復元した英賀城と現在の地図の重ねがき

6. おわりに

本研究では、地理情報データベースを整備し、英賀城周辺地域を容易に調査できる検索システムを作成することを目的に上記のデータを作成した。

文献だけではイメージしにくいのが、作成したデータを用いて図として表示させることで、現在の地理情報と過去の地理情報を簡単に、わかりやすく比較することができた。

作成したデータから、英賀城は、東西、南北とも約 1 km あり、大変大規模な城郭都市であったことがうかがえる。また、港を持っており、港を守る機能も備えた城であったことがわかった。英賀城は、1360 年頃から 1580 年に羽柴秀吉に攻め落とされるまでの約 200 年の間、南播磨ではきわめて大規模な城郭として、重要な位置を占めていたものと思われる。

謝辞

英賀城に関するデータベースを作成するにあたり多くの資料を提供いただいた池田善考氏に感謝の意を表します。

参考文献

- (1)西木馨：英賀城史，英賀保史蹟保存会，p.81，1977。